

アマルティア・セン著「アイデンティティと暴力—運命は幻想である—」

勤草書房 2011年7月15日刊を読む

## 優先事項と理性

1. ここで、選択の余地のないアイデンティティを主張するなかの、理解力の制約にもとづく議論とは別の、考えられる根拠を考察することにする。すなわち、「おのれを知る」うえで発見が占める中心的役割といわれるものだ。政治哲学者のマイケル・サンデルは、この主張を(その他のコミュニタリアニズムの主張とともに)次のように明確に説いている。「コミュニティは、人びとがその一員としてなにをもっているかだけでなく、彼ら自身がなにであるかをも説明する。それは彼らを選んだ(自発的な付き合いのような)関係ではなく、彼らが発見する愛着であり、単なる属性を超えて、彼らのアイデンティティの構成要素となっている」。
2. しかし、実際には、人を豊かにするアイデンティティは、自分の居場所を発見することによってしか得られないとは限らない。それは取得し、獲得できるものでもある。バイロン卿がギリシアを去ろうと考え、典型的なイギリス人である彼が心底から共感していた現地の人びとと別れることになったとき、彼にはそれを嘆くだけの理由があった。

アテネの娘よ、別れるまえに  
返してくれ、ああ、わが心を返してくれ！

バイロンがギリシア人と分かち合ったアイデンティティは、彼の人生を限りなく豊かにすると同時に、ギリシアの独立闘争を後押しするものであった。アイデンティティ発見論を提唱する人びとが考えるほど、われわれは自分が置かれた場所や帰属関係に閉じ込められているのではない。

3. おそらく発見論を疑問視する最大の理由は、われわれには与えられた場所においてすら、自己を認識するさまざまな方法があるということだろう。あるコミュニティへの帰属心は、多くの場合かなり強いものになるが、それ以外の関係や帰属を消し去る——または凌駕する——とは限らない。このような選択はつねに迫られているものなのだ(実際に選択したことを明言するために、すべての時間を費やしたりはしないだろうが)。
4. たとえば、カリブの詩人デレック・ウォルコットの詩「アフリカは程遠く」を考えてみよう。この詩は、アフリカ人の血を引く彼の歴史的な背景と、英語という言葉、およびそれにもなう文学文化への忠誠心(ウォルコットは非常に強い帰属意識を感じていた)によって別方向へ引っ張られる心情を描くものだ。

どちらへ向けばよいのか、血まで分割されて？  
イギリスの支配下で  
酔いどれ役人に悪態をついた僕が、どうしてこのアフリカと

愛するイギリスの言葉のあいだで選べようか？

どちらも裏切ることか、彼らと与えてくれたものを返すのか？

どうやってそんな残虐行為に向き合い、冷静でいられようか？

どうやってアフリカに背を向けて、生きられようか？

5. ウォルコットには、彼の真のアイデンティティを簡単に「発見」することはできない。自分がどうすべきか、人生におけるさまざまな忠誠心にどのように——どこまで——余地を残すか、彼は決断しなければならないのだ。現実のものであれ想像であれ、われわれは葛藤の問題にとり組まなければならない、食い違う優先事項や分化する一体感への自分の忠誠心がなにを意味するのかを問わなければならない。アフリカへの離れがたい愛着と、英語という言語を愛し、使っている事実(実際、彼は驚くほど美しく英語を使う)のはざまにある葛藤にウォルコットが思いをめぐらせば、そこに人生をいろいろな方向に揺り動かす、より一般的な問題が見えてくるだろう。相反する影響力の存在は、フランスでもアメリカでも、南アフリカやインドやほかのどの国でも現実のものだし、ウォルコットのカリブ海諸国でも明らかに見られる。歴史、文化、言語、政治、職業、家族、仲間など、異なった影響力が及ぼす深刻さは、十分に認識しなければならない。コミュニティだけがひたすら賞賛されるなかでも、それらすべてをかき消すことはできない。

6. ここで問われているのは、果たしてどちらのアイデンティティを選べるのかではなく(それはばかげた主張となるだろう)、われわれは実際に別のアイデンティティ、または別のアイデンティティの組み合わせを選択できるのかということなのだ。おそらくより重要なことは、われわれが同時にもつさまざまなアイデンティティに優先順位をつけるうえで、十分な自由があるかどうかだろう。前章で論じた例で考えてみると、人に与えられた選択は、たとえばユダヤ人だという認識によって制約を受けるかもしれないが、その人がもつ別のアイデンティティ(たとえば政治信条や国民感覚、人道的な責務、あるいは職業への愛着など)よりも、ユダヤ人というアイデンティティにどれだけの重要性を与えるかについては、やはり決断しなければならない。

7. ラビンドラナート・タゴールが一世紀前に書いたベンガル語の小説『ゴーラ』には、その名もゴーラという気難しい主人公が登場する。昔ながらのヒンドゥーの習慣や伝統を熱心に守っているために、ゴーラはベンガルの都市部に住む友人たちや家族の多くと異なっている。彼は頑強な宗教的保守派なのだ。だが、タゴールは小説の終わりのほうで、主人公のゴーラを大いに困惑させる。というのも、母親だと思っていた女性から、実は1857年起きた反英暴動の惨劇のなかで、反乱するセポイ〔インド人傭兵〕にアイルランド人の両親を殺されたために、彼がまだ赤ん坊の時分に、インド人一家が養子に迎えたのだと言われるのだ(ゴーラという名前は「色白」を意味する。思うにインド人離れした風貌で注目を浴びたものの、きちんと検査することはなかったのだろう)。ゴーラの過激な保守主義は、タゴールによって一瞬にして打ち砕かれた。伝統主義の寺院はすべて、ゴーラ自身が擁護していた偏狭な保守主義の大義のせい——「外国生まれ」である——彼に門戸を閉ざしたからだ。

8. ゴーラが直面したほど根本的な問題ではなかったとしても、われわれも自分自身について多くのことを発見する。しかし、だからと言ってアイデンティティはただ発見すべき問題だと見なすことではない。人が自分について非常に重要なことを発見したとしても、また選択すべき問題は残る。ゴーラはヒンドゥー保守主義を擁護し続けるのか(いまでは避けられない距離が開いたが)、

自分自身を別の人間として見るのか問わなければならなかった。ゴーラは最終的に、恋人に助けられながら、自らをただの人間として見なすことを選んだ。宗教やカーストや階級や肌の色によって定められることなく、インドに暮らすことにくつろぎを覚える人間として。たとえ重大な発見があっても、重要な選択はしなければならない。人生は単に運命で決まるわけではないのである。

[コメント]

アイデンティティとは何か。自分自身を見失うことは、他者へも大きな影響を与えることすらある。何がアイデンティティか、人間の安全保障の主唱者であるアマルティア・セン先生が幅広い見地から静かに語る。

－ 2011年9月2日 林 明夫記－